

飼料原料の動向と今後の見通しについて

昨年の本稿において、米国におけるとうもろこしの作付けが例年より早いペースで順調に進み、豊作期待から需給が緩み、価格の上値は重いとの見解を述べさせていただいた。

しかしながら、6月中旬以降の干ばつにより単収は大幅に低下、期末在庫率も記録的な低水準となった。シカゴ相場も一時8.3ドル/ブッシェルを超え、史上最高値を更新し、予想と大きく異なる結果となった。

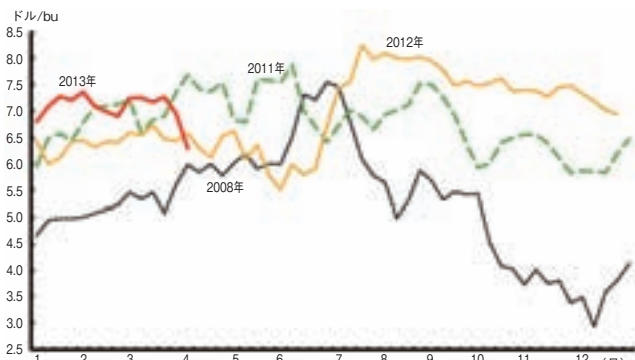
昨年の干ばつは1956年以来という記録的なもので、筆者も昨年8月に米国中西部を訪問したが、受粉障害によりイヤーにほとんど実を付けていない状態のクロープを多数目撃し、改めて事の重大さに気付かされるとともに、相場を予想することの難しさも痛感させられた。

■現在までの価格推移

(とうもろこし)

2011年は、旧穀の単収減による需給の逼迫に加え、作付け進捗の遅れから6月には一時7.9ドル/ブッシェルを超えた。その後、米国の高温乾燥懸念はあったものの、世界的な景気後退懸念や南米、ウクライナ産などとの競合により、相場は比較的安定的に推移した。

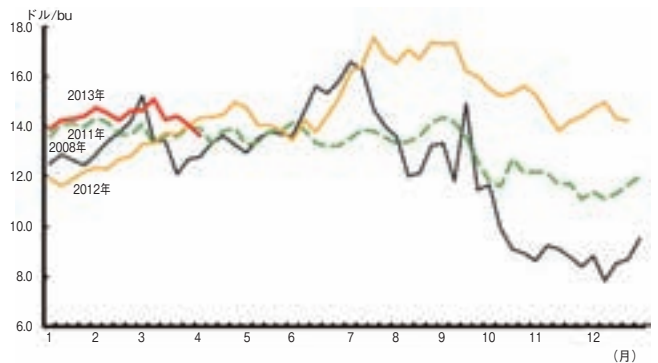
2012年は、春先の天候が良好だったことから作付けが順調に進み、6月上旬に5.5ドル/ブッシェルまで下落したが、その後の干ばつの影響から8月下旬には8.3ドル/ブッシェルまで急騰し史上最高値を更新した。年末にかけては米国产の輸出需要が低迷し、7.0ドル/ブッシェル前後で推移した。



(大豆)

2011年は、需給の逼迫感から前半は高値で推移した。その後、中国の買付けの一服感や南米の豊作見通し、欧州の金融問題を始めた世界経済の不透明感から相場は軟調に推移した。

2012年は、とうもろこしに比べ作付けは遅れたものの、生育は順調に進み相場は比較的軟調に推移した。その後の干ばつの影響を受け8月にはとうもろこし同様史上最高値の17.7ドル/ブッシェルを付けたが、11月の需給報告で作柄の回復が示され14ドル/ブッシェル台まで下降した。



■2013年度作付意向面積、四半期在庫統計

3月28日に米国農務省より2013年度作付意向面積及び3月1日時点の在庫統計が発表された。

米国のとうもろこしの作付意向面積は、97.3百万エーカーと前年をやや上回ったが、事前予想とほぼ変わらず。大豆は77.1百万エーカーと前年並みだが事前予想を下回る強い内容となった。

一方、とうもろこしの在庫統計は5,399百万ブッシェルと事前予想に比べ370百万ブッシェル上回り、大豆も999百万ブッシェルで事前予想を50百万ブッシェル上回った。四半期在庫統計が総じて弱気な内容となったことから、とうもろこし、大豆共に相場は大きく下落している。

<2013年度作付意向面積見通し>

	2013	予想平均	予想レンジ	2012
コーン	97.3	97.3	96.8~98.0	97.2
大豆	77.1	78.5	77.5~80.0	77.2
小麦全体	56.4	56.4	56.0~57.2	55.7
春小麦	12.7	12.5	11.9~13.8	12.3
デュラム	1.8	2.1	2.0~2.3	2.1

単位：百万エーカー

<3月1日時点の在庫量>

	2013	予想平均	予想レンジ	2012年12月	2012年3月
コーン	5,399	5,030	4,916~5,248	8,030	6,023
大豆	999	947	912~1,059	1,059	1,374
小麦	1,234	1,167	1,010~1,238	1,660	1,199

単位：百万ブッシェル

■2012/13年の需給見通し(4月米国農務省発表)

(とうもろこし)

2012/13年のとうもろこし需給は、先の四半

期在庫統計を受けて飼料需要が下方修正され、エタノール需要は上方修正されたものの、期末在庫は757百万ブッシェルと前月から増加。世界的には前年を超える生産量が見込まれ、特にブラジルの生産量の増加が目立つ。期末在庫率は世界14.53%、米国6.80%で依然として低水準である。

	10/10	11/12		12/13		
		3月	4月	3月	4月	
作付面積	88.2	91.9	91.9	97.2	97.2	
収穫面積	81.4	84.0	84.0	87.4	87.4	
収穫率(%)	92.3%	91.4%	91.4%	89.9%	89.9%	
単収	152.8	147.2	147.2	123.4	123.4	
供給	期初在庫	1,708	1,128	1,128	989	989
	生産	12,447	12,360	12,360	10,780	10,780
	輸入	28	29	29	125	125
	供給合計	14,182	13,516	13,516	11,894	11,894
需要	飼料・その他	4,795	4,548	4,545	4,550	4,400
	FSI	6,426	6,437	6,439	5,887	5,937
	(内/エタノール)	5,019	5,011	5,011	4,500	4,550
	総国内消費	11,221	10,985	10,985	10,437	10,337
	輸出	1,834	1,543	1,543	825	800
需要合計	13,055	12,527	12,527	11,262	11,137	
期末在庫	1,128	989	989	632	757	
在庫率	8.64%	7.89%	7.89%	5.61%	6.80%	

単位:百万エーカー(面積)、ブッシェル/エーカー(単収)、百万ブッシェル(生産量、需要)

(大豆)

大豆需給は、米国の生産量は前月比変わらず、期末在庫も据置かれた。世界的には、ブラジル、アルゼンチンの生産量は据置かれたが、中国の輸入量が減少し期末在庫は増加する見通しで、在庫率は世界24.11%、米国4.06%となっている。

	10/10	11/12		12/13		
		3月	4月	3月	4月	
作付面積	77.4	75.0	75.0	77.2	77.2	
収穫面積	76.6	73.8	73.8	76.1	76.1	
収穫率(%)	99.0%	98.4%	98.4%	98.6%	98.6%	
単収	43.5	41.9	41.9	39.6	39.6	
供給	期初在庫	151	215	215	169	169
	生産	3,329	3,094	3,094	3,015	3,015
	輸入	14	16	16	20	20
	供給合計	3,495	3,325	3,325	3,204	3,204
需要	圧搾	1,648	1,703	1,703	1,615	1,635
	輸出	1,501	1,362	1,362	1,345	1,350
	種子	87	90	90	89	90
	その他	43	1	1	30	5
	需要合計	3,280	3,155	3,155	3,080	3,080
期末在庫	215	169	169	125	125	
在庫率	6.55%	5.36%	5.36%	4.06%	4.06%	

単位:百万エーカー(面積)、ブッシェル/エーカー(単収)、百万ブッシェル(生産量、需要)

■2013年の飼料原料価格・需給の見通し

これまでとうもろこしの輸入先は米国一辺倒だったが、昨年米国における大干ばつによる供給懸念から、本邦においてもブラジル、アルゼンチン等の南米やウクライナへ輸入先が変わってきている。前述の需給見通しでも南米の生産量の増加が予想されており、品質的にも安定していることから、今後も使用する飼料メーカーは増加するものと思われる。

大豆は、最近発生した中国における鳥インフ

ルエンザにより、中国向け輸出需要の低迷予測などから値を下げている。南米産大豆も豊作が予想されているが、ブラジルのロジスティック(物流)問題から滞船の不安は払拭されておらず、強弱入り混じった内容となっている。

輸入大豆粕は国産に比べ価格的に有利とされてきたが、特にインド産はイランの旺盛な買付けにより相場は高騰している。菜種粕は国産が主流であるが、製油メーカーの搾油採算が悪くなっており、供給量は減少傾向である。

そうこう類のうち小麦ばん碎の副産物であるふすまは、小麦粉の需要が低迷し年末頃から受渡しに支障が出ている地域がある。また、コーンスターチや紙の需要の減少により、副産物であるグルテンフィードについても需給の逼迫感が強い。

■海上運賃

2013年も新造船の供給圧力により、海上運賃の相場の大幅な上昇は抑えられるものとは考えられるが、南米の新穀積みの集中が予想されることや原油価格の高騰により、下値も限定的と予想される。

■外国為替

2012年は、欧州金融危機問題の不透明感から1ドル77~80円で方向感を探る展開が続いていたが、年末に発足した自民党安倍政権の経済政策、いわゆるアベノミクスが好感され円安が進んだ。

2013年も年明け以降ほぼ一本調子の円安となり、3月には96円台を付けた。更に4月4日には日銀の黒田新総裁により市場予想を大きく超える金融緩和策が発表され、もう一段の円安となり99円台の水準に達した。

以上のように2013年は、米国のとうもろこしや大豆が順調に生育し単収が増加すれば、軟調な相場展開となることも予想されるが、急激な円安の進行がそれを打ち消してしまう可能性がある。

輸入穀物への依存度の高い飼料業界においては、為替相場が落ち着きを見せるか、1ドル100円を超える水準まで円安が進行するかで情勢は大きく変わってくる。

また、安倍首相はTPPへの交渉参加も表明し、今後、畜産物価格への影響も懸念される。従って、我々も今まで以上に原料調達コストの低減に努めていかなければならない。

飼料原料の動向は今後も大変厳しい状況であるが、引き続き南米産とうもろこしなどの利用による産地の多様化や、新たな国産原料の探索などを進めていく必要があると考えている。

(飼料単味課 氏家)